までもない。

こゝで甚だ烏滸がましいが、一寸記述の廻り途をして附け加へて置かねばならぬことがある。この龜茲語卽ち中亞出土の文書によつて初めて知られた不明語中の所謂第一言語のB種に對する命名については、隨分曲折を經て今日に至つたのであつて、一九二三年には博士はこれをクチャ語と命名されたが、それは嘗てクチャの境域に行はれたものであるからといふ以外には、別に的確な證據理由を伴はなかつたので、まだ一般の承認を得るには至らなかつた。然るに自分は昭和五年五月東京の史學會大會の講演中の一節に於て、ウィグル文の摩尼教文書や佛典にキュセンと記されてある名を解釋して、これこそ唐代頃のトルコ族が龜茲を稱する名であつたことを明らかにし、曾て獨逸のミュラー博士等がトルコ文佛典の奥書に見えるキュセン語といふ名を、クシャナ卽ち貴霜の語と解釋し、世界の學者が皆これに從つて居ることの誤であることを指摘し（同年九月號史學雜誌所載拙稿參照）ついで同年十二月にはこれ等の文書を詳解して、重ねてこの意見を公けにした（桑原博士還曆記念東洋史論叢所收拙稿參照）。これ等の論文は共に佛文に飜譯し、前者は昭和八年（一九三三）日佛學館から、後者は昭和七年（一九三二）東洋文庫から出版せられた。これによつて唐の頃に龜茲に行はれた言語を、トルコ語ではキュセン語と呼んで居つたことは疑なく、從つて博士が嘗てこの地に行はれた第一言語のB種をクチャ語＝若し唐代に行はれた漢字を當てはむれば龜茲語＝と命名されたことは、單なる便宜や想像ではなく、かく呼ぶことが正しいことの證明を得た譯である。自分のこの論文はその要領をペリオ教授が逸早く一九三一年に通報誌上に載せ、更に一九三四年ジューナル・アジヤチックに寄せた「トクハラ語とクチャ語」といふ論文中に引用して、クチャ語といふ名稱の適切なることを論證して居るが、